

事例紹介

福岡県飯塚市立 庄内中学校



ダウンロード学習で、テスト勉強！ ～40台のタブレットPC持ち帰りで確実な成果を～

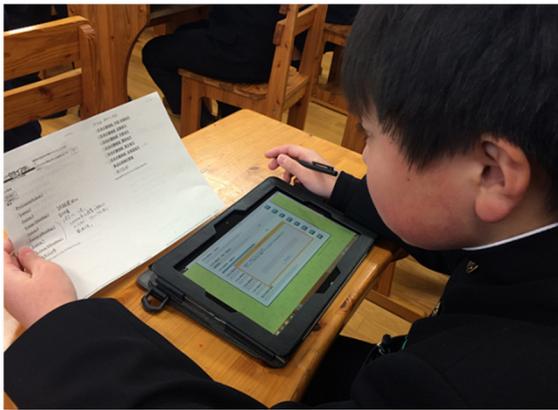
庄内中学校では40台のタブレットPCで、2年生の希望者を対象にダウンロード学習アプリを使った持ち帰り学習を行っています。限られた台数のタブレットを効果的に使って成果を上げている実践をご紹介します。

運用 持ち帰り学習の流れ

● 持ち帰り希望者はHR後に集合！

この日は2年生の希望者がドリル教材のダウンロードを行いました。希望者はホームルーム終了後に活動教室に集合し、先生からの注意事項を聞いてダウンロードを行います。

今回初めて挑戦した生徒は「前回友達が持ち帰り学習をやっていて成績が上がったと聞いて、自分もやりたいと思いました。次のテストに向けて頑張りたいと思います！」と期待とやる気いっぱいに語ってくれました。



● 期末テストの範囲をまとめてダウンロード

先生から期末テストの範囲一覧表が配布されると、生徒たちは該当する単元を見つけて簡単にダウンロードしていきましました。

国語以外の4教科の中から優先順位をつけてダウンロードするように先生から指示があり、生徒たちは特に力を入れて学習したい教科を選んで進めていました。

最後に一番優先した教科はどれかとアンケートを取ったところ、理科が10名と一番多く、次いで英語との回答が得られました。

● 家庭学習から成績提出



タブレットPCにドリルをダウンロードしたら、自宅に持ち帰り好きな時間に学習します。そして、翌日学校で成績を提出（アップロード）し、夕方持ち帰る、というサイクルで運用されています。

保護者からは「家での時間も手いっぱいなのに、ちゃんと学習できるのか？」と最初は心配していましたが、一緒に始めてみると時間がたつのを忘れて進めていました。間違えた問題が何度も出てくるのが印象的で、間違いを意識できる点が良いと思いました」との満足の声が上がったそうです。



▲ 家庭での学習の様子

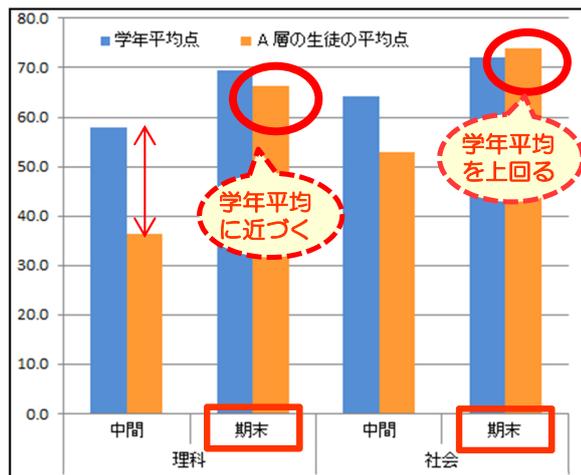
● 生徒の得点の伸びにビックリ!

2学期は、期末テスト前に理科と社会に絞ってドリルの持ち帰り学習を行いました。持ち帰り実施前の中間テストの結果が学年平均に達しなかった生徒（A層）を対象に、期末テストの結果を調査したところ、先生方も驚くほどの大きな伸びが見られました。

- ★中間テストで学年平均点との開きが20点以上あった理科では、A層の平均点は10点以上上がり、学年平均に近づいています。
- ★さらに、学年平均点との差が約10点だった社会では、今回、A層の平均点が学年平均を上回っています。

「理科が苦手だった生徒の点数の伸びが大きく、丸付けをしていてビックリしました。ドリルを繰り返し学習した成果だと思います」と木場（こば）先生。

【中間テストと期末テストの平均点の比較】



● やれば伸びた! の実感が自信に

「今回のテストの結果を受けて、生徒自身もやればできた! と達成感を感じ、積極的に継続して取り組んでいます。理科や社会は繰り返しで力がついていく教科なので、効果も大きかったと思います」と穴田先生。結果に結びついたことで、生徒の自信にも繋がっていきました。



理科：木場 一茂 先生



学年主任：穴田 真一 先生

● 生徒の感想 ●



ドリルは解説や確認問題があって、ポイントを確認できるのですごくわかりやすかったです。成績もすごく上がって、社会は20点位、理科は30点以上上がりました! 間違えた問題も覚えるまで何度も繰り返したのが良かったと思います。これからは自学ノートを併用して、要点を書き写しながらやっていきたいと思っています。

工夫

運用の工夫と今後について

運用開始時のねらいから今後の方針について、原中教頭先生と横山先生にお話を伺いました。

● 40台のタブレットで確実に効果を上げる

40台のタブレットを本校の規模の中でどう使っていこうかと考えたときに、学年を絞り、実施率を上げて確実に効果を出す「希望制」が適切だと判断しました。

初めに授業でeライブラリを紹介し、その直後にアンケートで希望を募ったところ、26名が手を挙げました。利用したいだけでなく、普段の家庭学習や自学ノートの取り組み状況などを含めたアンケート内容にし、確実に実施することを求め、持ち帰り学習を行うことの意識や責任感を高めるよう工夫して取り組ませました。



原中 昭一 教頭先生

● 「やらないかん!」という意識付けを

生徒は、実践を進めていく中でeライブラリの使い方にも慣れ、自分に合った学習方法を身に付けてきています。eライブラリは小学校の問題に立ち戻って学習することもできるので、今後は勉強に苦手意識のある生徒の個別指導や入試対策等にも応用できればと考えています。

大事なのは、生徒たちに効果を実感させながら、「やらないかん!」という自ら学ぶ意識を持たせることだと考えています。



情報担当：横山 晋祐 先生